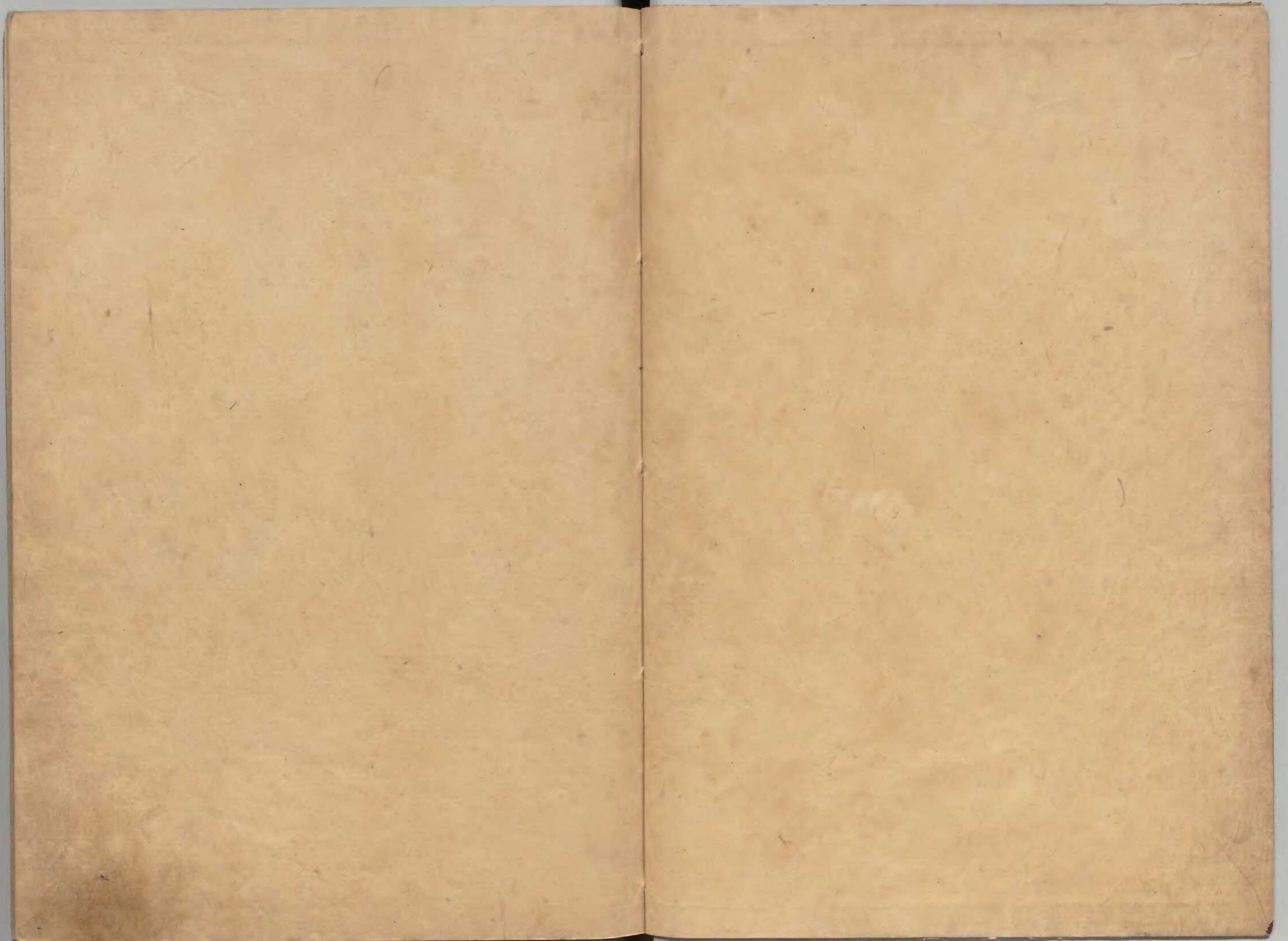


寛永諸家譜

村上源氏
二卷之内

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (158)
函號	76 1





有馬

進

石野

木造

別下

一尾

坂方

坂井

萩原

寛永譜家系圖傳

村上源氏

有馬

赤松の流多

人曾六十二代
村上天皇

具平親王

柳房

顯房

淺草文庫

雅實みやび じつ

雅定みやび じやう

定房じやう ぼう

定忠じやう ちゆう

赤松の祖あかまつ の せむ

柳季やなぎ せき

季房せき ぼう

后之祖ごう の せむ

季則せき じゆく

頼範より はん

則景じゆく けい

后之祖ごう の せむにて赤松あかまつ播磨はりまと号なづす

家範いへ はん

后之祖ごう の せむ播磨はりま

久花ひさな

五位ごい左ひだり近ちか衛ゑ監けん

昌あき邦くに少すく輔ほ

茂花しげな

赤松あかまつ太郎たろう

義則よしのり

次郎じらう早世はやよ

則村のりむら

次郎じらう入道にゅうだう冬心ふゆしん月潭げつたん号ごう一いち法雲寺ほううんじ

也号やごう也や

則祐のりすけ

律りつ師し

義祐 よしすけ

出羽守 でゐのり

右馬守 みぎうまのり

持家 もちけ

右馬守 みぎうまのり

元家 もとけ

上総介 かみさとのすけ

則秀 すけひで

出羽守 でゐのり

澄則 すみすけ

刑部太輔 かきうべのたすけ

則家 すけけ

与次郎 よじらう
播磨国 はりまのくに
右馬守 みぎうまのり
の部 のべ
を を
領 りやう
と

法名清徳

重則

筑後守 橋本 國有 那の守 護後
播磨 三木 海田の城 一 伯と

則頼

中務 伯耆 長部 郷 法 平 中 國 播 磨 三木
淡河の城 一 伯と 母 八 細川 太 京 大 史

澄えの女

号長田多二月

大指現 和泉 大納 利家 和泉 和の伯
あり 後 伯 和 後 せ 一 のん と 一 一 一

利家 疾 甚 急 たり

大指現 友 和泉 守 大坂の宅 一 清 御

ありて 利家の 病 減 病 いたま 利家
後 変 と 託 して 指 言 状 減 状 一

大指現 伏見の城 一 還 府 一 たま

徳臣いさめく曰誓物成利家
しむへ水されども遅滞及る
此時別於進ていし利家の命
たりなり於は終を所く是を
懸懐せしめん
大指現その懐をよみてこれり
まごびしこまふ
四年三月石田治政を捕送保を
つて

大指現伏見の敵圍ふりかゝるまきの
りきこゆ時り別於屋中
信してわつてまのり聖日
大指現白鶴り清沙あり日東勤仕
しつゝまつり志なく恩言を
つらつ武東深文よ及て私室
り退くとき

大指現沙屋をそりせ新ひく命
しそりすしつて凶賊道路り

わろへ〜まろ〜と
心と〜と

是れよりさき別頼秀者のこと

り結する時

大指隈關東沙下向のみを執る

大指隈親政を以てつ〜

ねて沙上洛河りて伏見の城

ま〜守時紅粉屋肩衝をこ

いまり〜りて家傳とす

同五年

大指現

名徳院敵系勝を征せんとして沙上

馬の時供を〜て小山より〜

小石田之成保報の〜とさ〜

つて漢列の〜とさ〜

供を〜て關ヶ原より〜成徳院

の故本館指列有る郡の四二万を

〜〜結りて回那之田城を領す

同七年七月下旬より率と

女子

有馬伯耆守の妻

女子

後継有馬氏

女子

石野和泉守の妻

女子

中山中將室

豊氏

玄蕃頭 中園播磨守

後遠列 横洲侯の城より

之可名を飲ぶ

長生四年石田三成逆謀をくはら
大指現友軍和泉守大坂路高橋の
宅小 濱御河守豊氏父とあり
参候一山廻道河津を引て玄上
とくいしく相つらハ沙家人
列して勤仕せしり
大指現それ忠誠を感づたまひ
豊氏をして復古城の書をつとめし
大坂付還の要地くら城の引く

同五年

大指現京勝を征し移入とき供を
て野列小山よりいり
大指現石田が謀叛をきこつて軍
を之に豊氏横洲賀の城を沙家人
衆へあづけ家臣二人城小回原へ出
りて人質とり沙進發より紀
つら濱列赤坂陣とあり
大指現赤坂より沙進發の時大坂乃

塚中より兵隊出でていざみうらふ
中村式部が備が兵士退縮をせし
兵を棄つて急りうら河敷城中へ
引とり柵をとらんをすその時家臣
輪次右近柵を破く首級をぬき
大権現豊氏及右近をうつて乞を
廢棄したまふ用て原合戦の日
大地の城攻をさへんがしあ赤坂よ
陣よりこれ

大権現の命よりしりてなり

同年穀倉の動回を感づき
とくくしとまかりて六万石を飲ど
丹波國福知山の城より約せ
同七年別荘率して後領地二万
石改を氏りたまふり部て八万
石を飲せ

同十四年丹波の藤山の沙善徳を
川とせ

同十九年戸中舊徳を以て

名述院殿沙いしゆたまたりて四

ふり付り秀頼乱をとこせ

大権現徳将り命じて出陣乃

そふをさしむ其氏固り帰

らすして壺は搦列吹回り陣

ゆる

大権現そのころごのをこつ

ごり事を感してつよひて

あ御下沙と海乃ち作をひり

松平周防守忌部内膳正市橋下総守

別下を授与とたふ天海は陣

りて攻伐のちりりをもとけ

合張等とつまひ

翌年大坂落城の時多首級を討

え和四年大坂の城壁をさづ

同六年

名述院殿の御命よりして旧儀を

て執後、梅り十二万石をくまへ
くまへり部て二十一万石を領ぐ
久為、牙、此城、居と

寛永三年、新幸の、時、辰、日、迄、下
り、叙と

同五年、大坂の、城、築、と、ま、つ、つ

同六年、沙、越、と、り、り、四、乃、と、ま

度、座、舟、の、雲、記、と、り、り、別、新、此、沙

脇、指、と、り、り、り

同十一年、沙、上、海、の、使、使、侍、後、の、任、と

同十二年、戸、と、後、を、使、と、り、り、乃、と、ま

新、者、五、の、沙、脇、指、を、派、使、と、志、の、み

の、り、り、家、人、派、湯、一、た、と、り、り、り

白、浪、衣、服、を、お、飲、と

同十三年、将、軍、家、目、光、沙、社、森、の、と、記、を、氏、供

な、り、り、沙、馬、城、に、ま、り、り

同十四年、肥、前、の、國、有、馬、部、一、孫

物語起し

將軍家鍋橋信法守を花飛彈守
とよびき氏を以て是を継成せし
し十一月廿九日有る表に陣を敷
翌年の暮かこつて九列隊を遣
さりしとき大軍を發して後
地りいつりて家臣多討死し
と落城の後國にかけりし
りて久多子の城にをひく

越年と

同十七年日光御社参り供養と

則次

九郎次郎 又也

豊長

大学出雲守 廿四掃部頭

長七十一歳 豊長六歳 丹波山より
是氏が人質 水戸より 江戸より
さしつかへ

大権璽をよび

名徳院殿より 湯ゆ——

江戸より 阿部より 八年より 乃くち
忠綱を長より かつりく 江戸より

さしつかへ 是より 乃くち 豊長より
さしつかへ 丹波福地山より 乃くち

兼光の沙脇及衣服はたまたま

同十九年 同亦年 大坂支陣より

豊成より 随て 軍事を川とむ

元和二年より

名徳院殿より 寛永九年より

至りて十七年 在江戸より 乃くち

先元和六年 領地より 乃くち

同七年 乃くち 下より 出雲守に

乃くち

寛永九年九月

將軍家日光沙社ちやえんの侍供

回十一年 沙上流の侍共ごいを

回十三日 四月日光沙社ちやえんの侍

供

回十七年 四月日光沙社ちやえんの侍

忠ちゆう郷きやう

中務ちゆうむ大輔おほほむ忠勝ちゆうたつの御ご腰こし物ものを

松平源七郎まつらへんの御ご腰こし物ものを

大指おほさし現げんの御ご腰こし物ものを

とて忠ちゆう郷きやうの御ご腰こし物ものを

中務ちゆうむ大輔おほほむ忠勝ちゆうたつの御ご腰こし物ものを

儀ぎ式しき嚴げん重じゆうの御ご腰こし物ものを

大小おほおほを忠ちゆう郷きやうの御ご腰こし物ものを

とて忠ちゆう郷きやうの御ご腰こし物ものを

このとき忠ちゆう郷きやうの御ご腰こし物ものを

前まへへ出でて御ご腰こし物ものを

慶長十六年九歳より一七歳
さいころ

大権現をよび

名流院敵り一喝しつる

同十八年

名流院敵安有對馬守命して

敵中よをひく元服し返り下

し叙し中務お捕り仁比中務

よをひく是を着となす

光忠の沙腰物を洋行し且中務を

よをひく忠心と号し

元和三年伏見よをひく云部太補

仁比

寛永十四年肥前國有馬郡一揆

蜂起のとき瑞穂立花よをひく玄蕃

よをひく是を討伐し十一月十

五日

將軍家の命をりく江戸

有馬よりいりて豊氏を以て陣を法

翌年正月朔日上使板倉内膳正

石貝十虎城をせし豊氏之九をか

こし忠信未明又兵を率して城

下小着旗を城の内又投入家長松田

作兵束等多討死を

二月廿七日瑞鴻が攻口を力りて防兵

を侵を瑞鴻よりけりて急り

城のりつ志のんりといひ送るこれ

すりて柳原飛弾守又子瑞鴻陣

下より先登と忠郷豊氏勢を

率して二九り入る谷我を

同廿八日忠信が兵討つ多首級討死

かひ死を此日城は井も落忠信す

と江戸よりいふは 信よりいふ

ありしを中務が捕中号をも舊名

より城を川へのゆへり毎夜

膳イらまイりイ四イ又イ由イ付イ沖イ馬イ衣イ敷イ守イ
とイ清イ飲イとイ

信ニ保ニ

長ニ門ニ守ニ 早ニ世ニ

頼ニ次ニ

伯ニ耆ニ守ニ

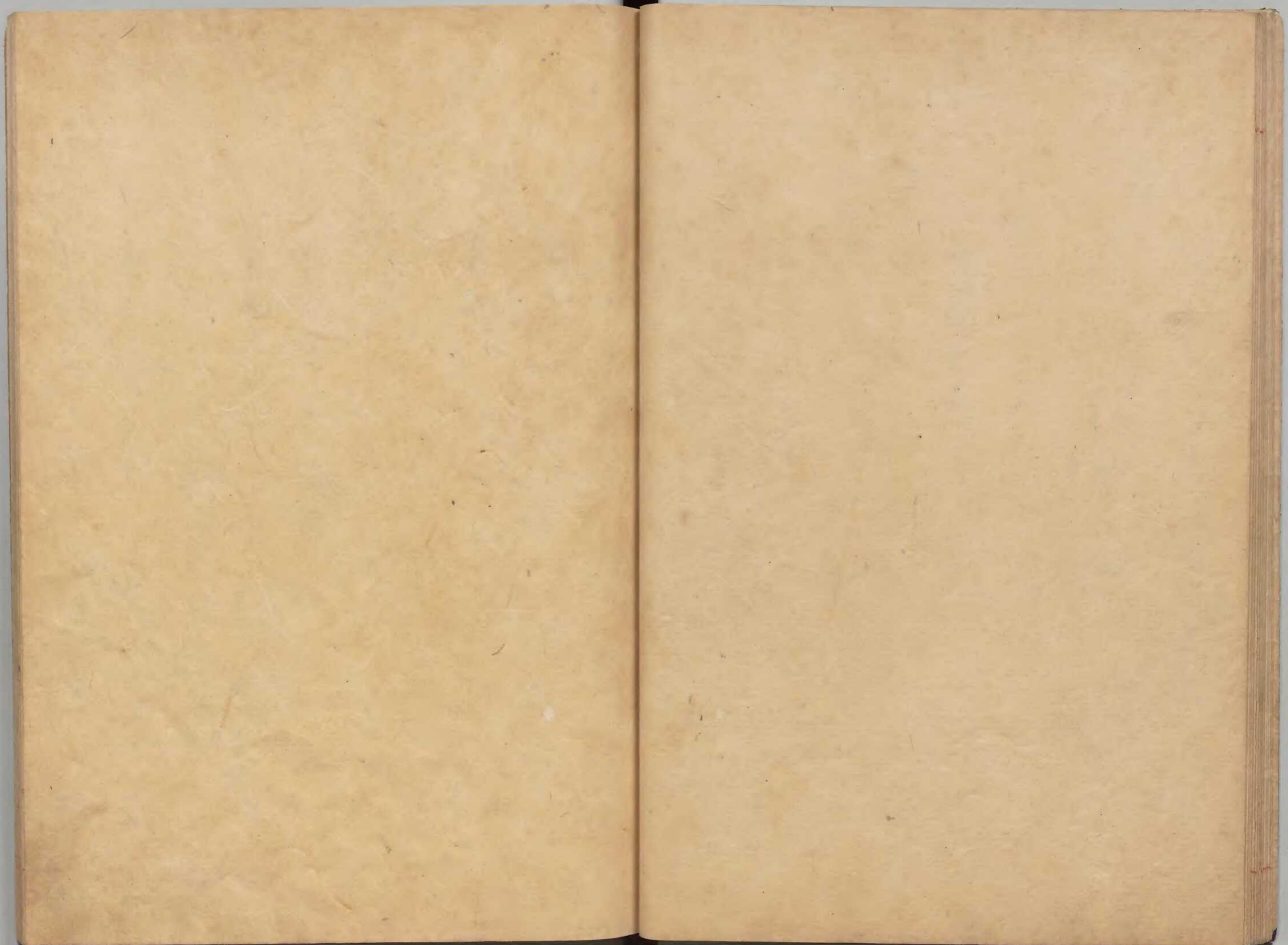
女子

鳥ニ居ニ溪ニ流ニ守ニ妻ニ

女子

小ニ右ニ快ニ煙ニ太ニ史ニ妻ニ

家のニ紋ニ 釘ニ拔ニよニ之ニ巴ニ



● 重頼

有馬

伯耆守

中園播磨三木

有馬兵部卿

法平

則彩妹の子

玄蕃頭其氏の婦を以て

是月ありてこれより母

の族よりありて此の氏とあり

るぐの片 剛白秀次よりつゝこを
親族よりをり何て忠氏より
丹波より伯耆と

重春

内務卿 生田回書

忠氏より一属一親族よりつ

重良

石見守 生田丹波

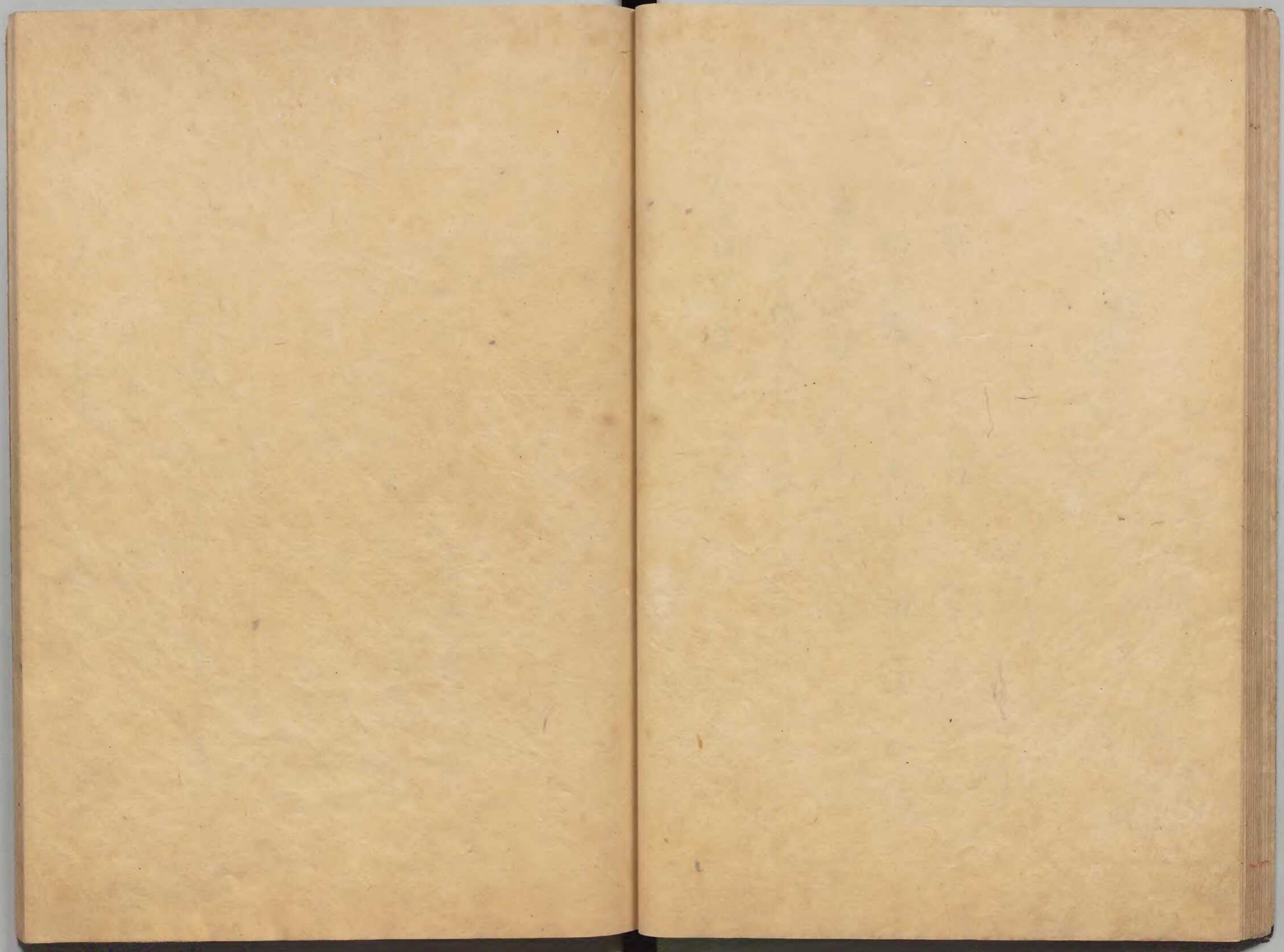
寛永元年九月よりつ

右徳院殿より賜へる

同二年より中津小姓組の番より

同七年十二月江五位下より叙

家の紋 虎巴



村上天皇二十七年

● 別村

進

別村より前いんの系譜ひ有馬氏うま乃
下さりあり故ゆゑこれを略りす

五位判官ごのかん次郎入道じらうみち 法雲ほううんと号なづす
元弘げんこうの合戦あつせんより忠節ちうせつありしより
赤地あかぢの綿わたの虫むしをとりしより

則訪

妙吉 津師

應長元年（1170）乙巳（1175）元安四年十一月
十九日（1175）死（1175）室林寺（1175）と号（1175）と

義則

兵部（1175）少輔（1175）左京（1175）右少輔（1175）大膳（1175）右少輔（1175）上総（1175）介（1175）
諱（1175）一之尺（1175）入道（1175）と号（1175）ふ七十五歳（1175）了（1175）
て死（1175）と 法名（1175）延齡（1175）性松（1175） 龍徳（1175）寺（1175）と
号（1175）と

義雅

伊豫（1175）守（1175） 五十八歳（1175）少（1175）く（1175）自（1175）号（1175）と
法名（1175）性通（1175）大昌（1175）院（1175）

性存

勝岳と号と 存或は号は作

政則

次郎法仲と号と 信之位 長初が備

左京大史

俊前播磨美作之介圓の守後

明應五年四月亦自は死と 歳四十二

法名之等性元 松兼院

義村

次郎と号と 七條の忠政則の孫子

晴政

次郎と号と 長初が備 法名性湛

成村

筑後守二十九歳少く死と

成季なりとし

進伯耆守えんのこうまのさむらひ 後赤松と号と 六十日
歳して死と

成時なりとき

赤松菊太郎あきまつくさぶら 後進伯耆守と号と
六十之歳少く死と

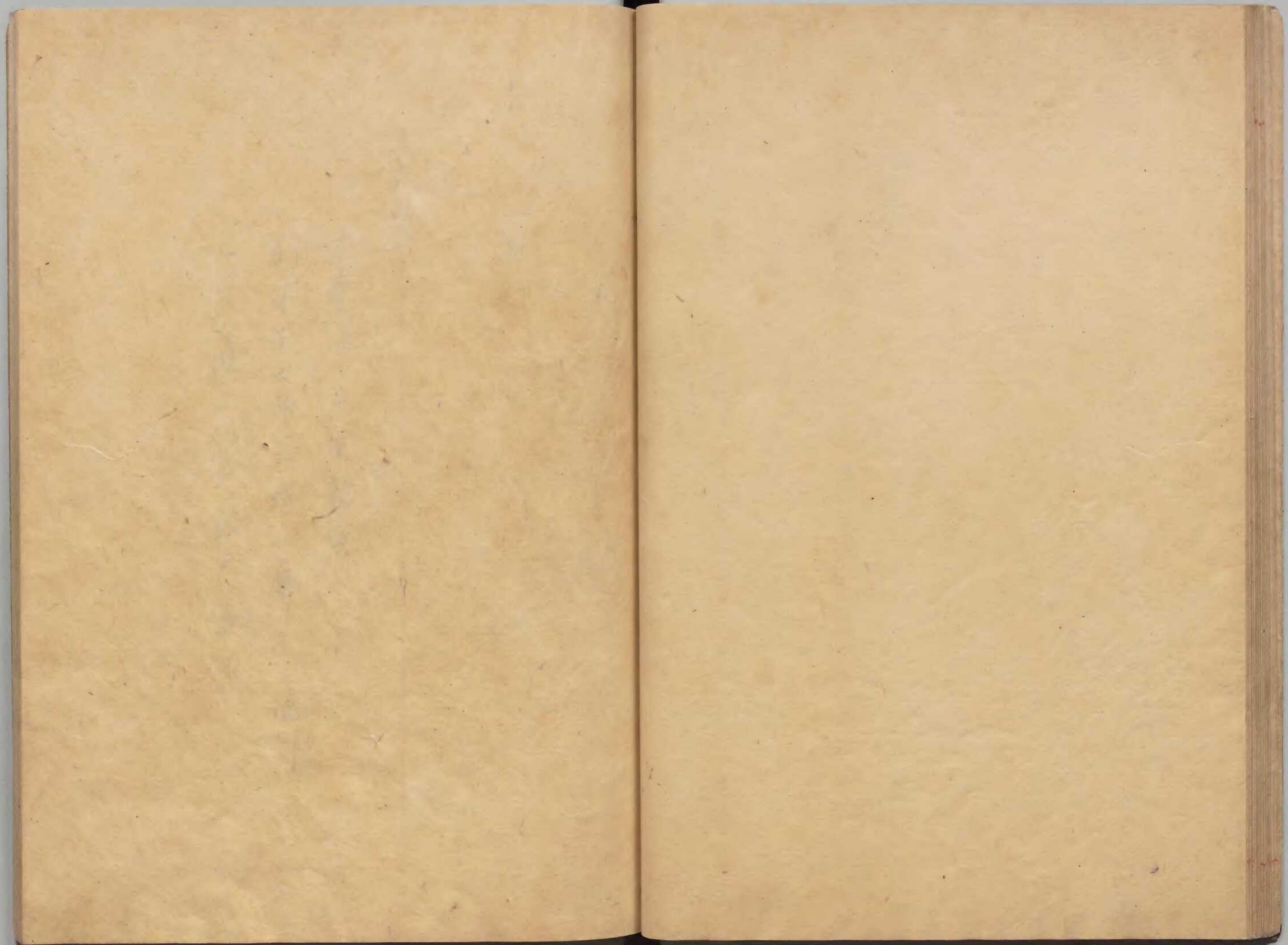
成政なりまさ

進三十一郎

成秀なりひで

進兵太郎

家の故之次いへのかつぎの左ひだり巴よこ横引よこひき也



● 氏貞

石野

右京進

十四攝摩

別下

小之部長春之属

攝列

石野の城は伝は教為軍司

氏海

和泉守 後越後守 生田日守

別当長春一厨一掃列之木乃城

一揃籠付秀吉乃部将古田

吉左衛門城亦成地のくら身乃取城

氏海柵の中より是を射落し柵

の亦りいづく其首をとる落城の

乃ち秀吉よつて取ありて去か列

大納言利家よけふ

天正十八年利家武列八王寺城

をせしむ時氏海先登して首二級を

ゆらし此外取方我田ありといふも

所ふさしりありとありとふさしす

か別よとふして又十日歳めく病死

法名宗英

氏置うぢおき

八巻

中四回

母は有る中務ちゆうむ

が女め

文禄ぶんろくえの七月下旬十九歳けいじゅうそ

九列名古屋くけつなふるやよよひひくく

大樽おほづゑよよけけ之のくくくくももつつ

同日つひ年とし上のうへ徳とく四よ天あま羽は岡おか東とうああ那な二に

子こ不ふ此こゝ飲のむ地ぢととたたままよよ

氏次うぢつぎ

安長六年先祖やすながのむねの由ゆ来き

右みぎ聞きよよ

達たつ一いつ沙さ使し番ばんととななりりみみのの字なれれ物もの

物もの成なりゆゆりり三さん十じゅう九く歳さいそそ後のち列れつ

りりとといいてて病か死し法は名な道みち雷らい

八巻

松平まつだいら肥ひ前まへ守のり少すく佐さよよ

正史

源平系

紀列大納言於宣卿よけふ

氏照

八景 中園上總母の内者源次女

が女

是又七十七年氏照四歳

大権現の命をうり父の遺願二

子石をたふ

寛永四年十九歳して御書院書

とけとむ

同十年涉小野紀の妻入

同十六年安新に以てなる

氏守

又右衛門 中園武虎

家の紋

養^う松^ま

具平親王十六代

● 俊康

俊康のたいみじん
権大納言正二位

本造

小島の彦流なり

持康

権大納言正二位

教親のりちか

右中納言 従二位

政宗まさむね

左中將 従三位

俊茂とよしげ

参議 右中將 従三位

具康ともやす

右中將 従四位下

具政ともまさ

右中將 従四位下

長正ながまさ

大膳亮 一平いちへい 長勝ながかつ

福徳在東のち更よは之死を

具次

市兵衛 十四年

織田常真より

是より十月八月廿六日死に

七十三 法名宗有

勝雅

お兼下総也

早合の系園より 雄利より

女松極三郎を兼よ嫁してこれを

らぐめ出家の時ハ源城寺に

還俗して勝川一益より

之節を兼よと称して後信雄より

又秀吉よりは之お兼下総也と

よし具政が甥なり

後宣いふ

七左衛門尉

十國伊勢いせ

寛永十七年六月廿六日

右注院殿い 湯い たくまはら

御書院い 書い 川い 心

大坂い 支い 沙い 陣い 伊い 奉い 支い 沙い 陣

五月七日い 首い 級い をい ぬい けい

寛永十年

將軍家の御命い ありい けい けい 大書い の

継い 取い とい りい

後次いふ

清左衛門 十國日安

寛永七年十二月十五日

右注院殿い 湯い たくまはら

將軍家い へい けい けい 大書い の

後雅

寛永十九年

寛永十九年三月十六日

將軍家より謁見したる事

同年六月より沙中院書を勅じ

家の紋 丸巴

別取

● 重治

かまゆ 十圓播磨

重宗

白氷正 中圓日茶
伝長 一 二のらぬ 秀吉よつふ

重家しげ

孫まご右馬うま尉い 廿四にじゅうよ但馬たにま

十四じゅうし歳さいふしておと忠ちゆう者しやをにはてふまつる

忠ちゆう者しやを薨逝いの後 命いのちをあらわします

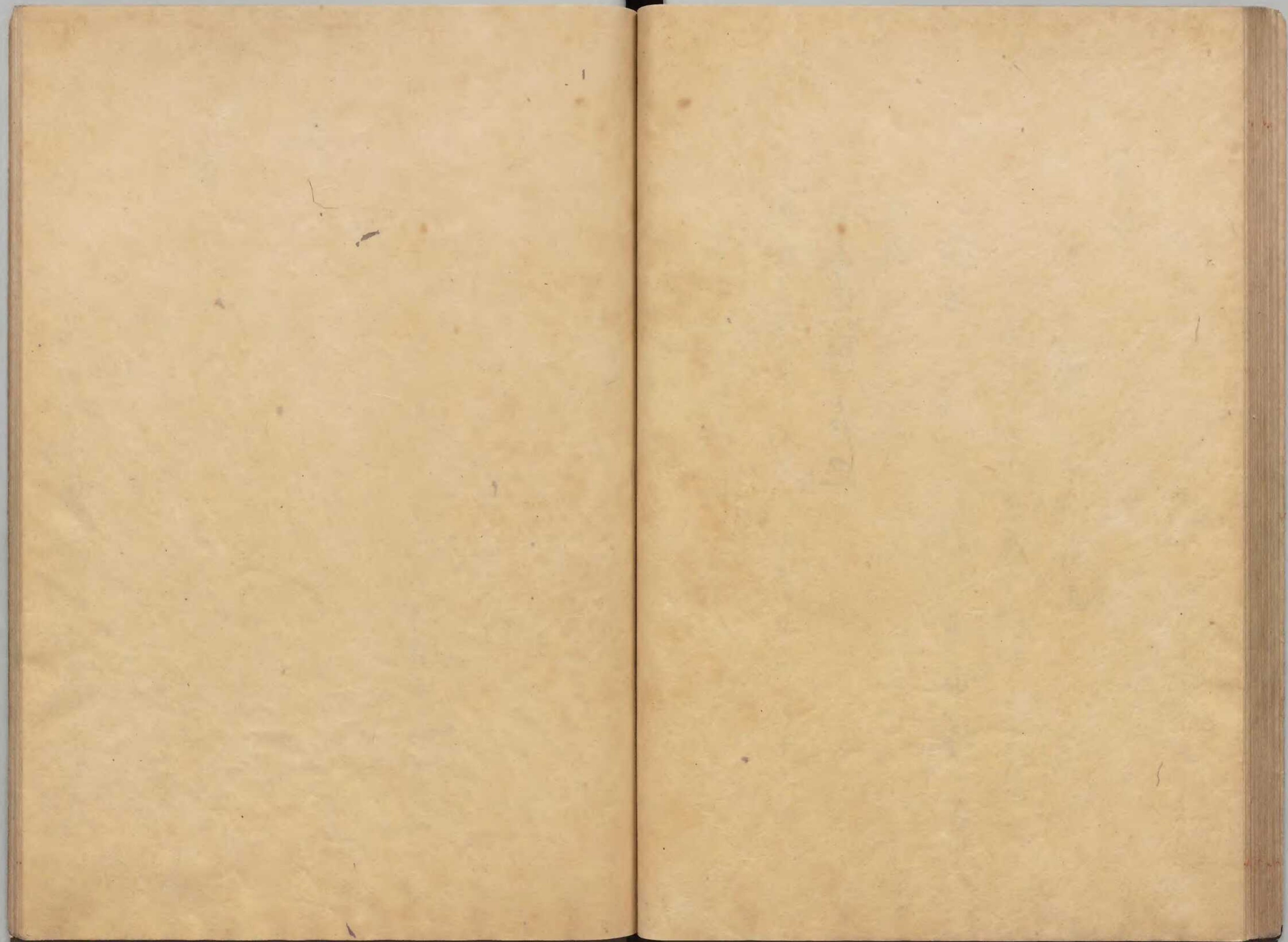
大おほ指さし状じやうをもとむ

右みぎ近ぢきん院いん殿のん

将しやう軍ぐん家けをりにくしまつる千せん二に百ひゃく

ふの地ちをもとむ

家の後のち 大おほ巴おん



通眞 しんま

久我大政太長雅實公くがのたいしやうの十八代じゅうはちだいあり

右大将権大納言うだいにしやうけんの正二位せいじに

一尾 いちび

村上天皇の末流久我相國雅實のむらむらぎ むらむらぎ

三休さんきゅう

母は着列武田伊豆守信光の妹
天正十五年の病死 法名日勝

通春とうちゅん

一尾淡路守 牛園寺の住持
一尾の久我の稱号を改め一尾と
稱す母は大友左衛門義徳女義徳

法名宗麟しゅうりん

安永八年九月

大権現の御湯の御湯

同十六年江別浦中郡にひこ子

名の地をさす

同十八年六月十九日信五の信下り

叙しよと

大権現の薨御の後

名徳院殿の御湯の御湯

寛永十年

將軍家より上総國にさしつく二百

石の地をくくりにし

同年八月七日病死歳五十六法名

日光

通尚

伴織 中國武苑江戸

母ハ大友たき東督義統女義統

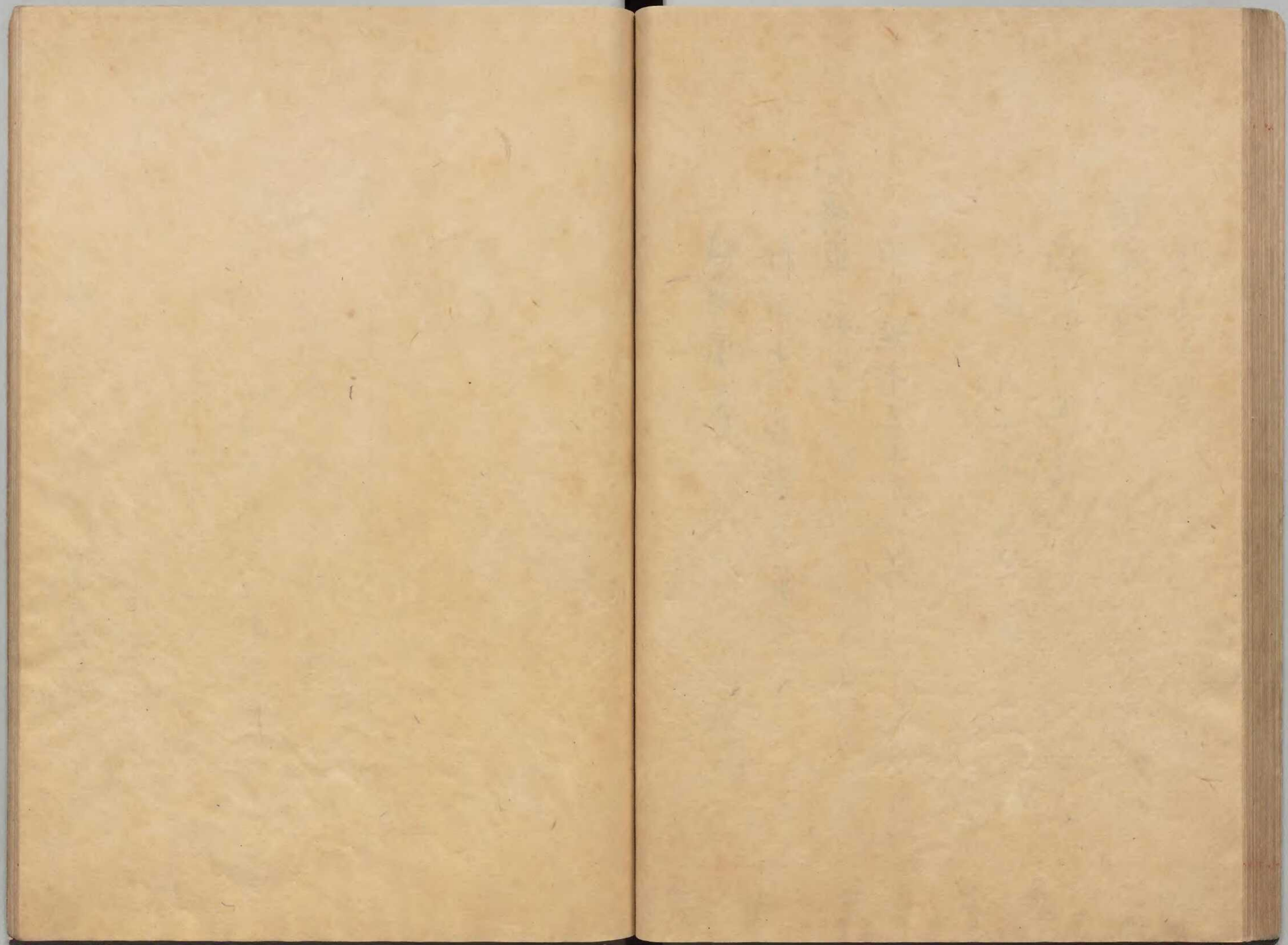
法名宗嚴

寛永十一年正月二十八日

將軍家の洋湯しつり父乃

記を継千石の地を給し江戸に候

家の紋 辨贖



● 某

友方 ともかた

友方 ともかた 伝 ついで

友方の城 ともかたのしろ 舟 ふね

四日 よっぴ 小島 こじま の族 うぢ り

法名 ほふな 棟 むね 杖 つゑ

朝成 あさなり

刑部 かみなり 太史 たふし

鑿 せき 列 りゅう 多 た 氣 け の内 うち 陸 りく 田 でん の

城子居也

勢別院住のちよ入る院住人等後

秀吉子孫

長二年六十八歳小して死す

法名肝梅

安正

平九郎

織田上野介子孫のち秀次子

はよ

長元年

信成殿り山名禪高

子孫

大権現よりはくま

同二年九月下総の回次襲撃

をひて領地五百石を多る後

名徳院殿よりはくま

元和八年正月四日五十二歳

死す

安利 アノリ

平九郎

元和八年九月

名陸院殿より此へへつるのり
將軍家より此へへつる

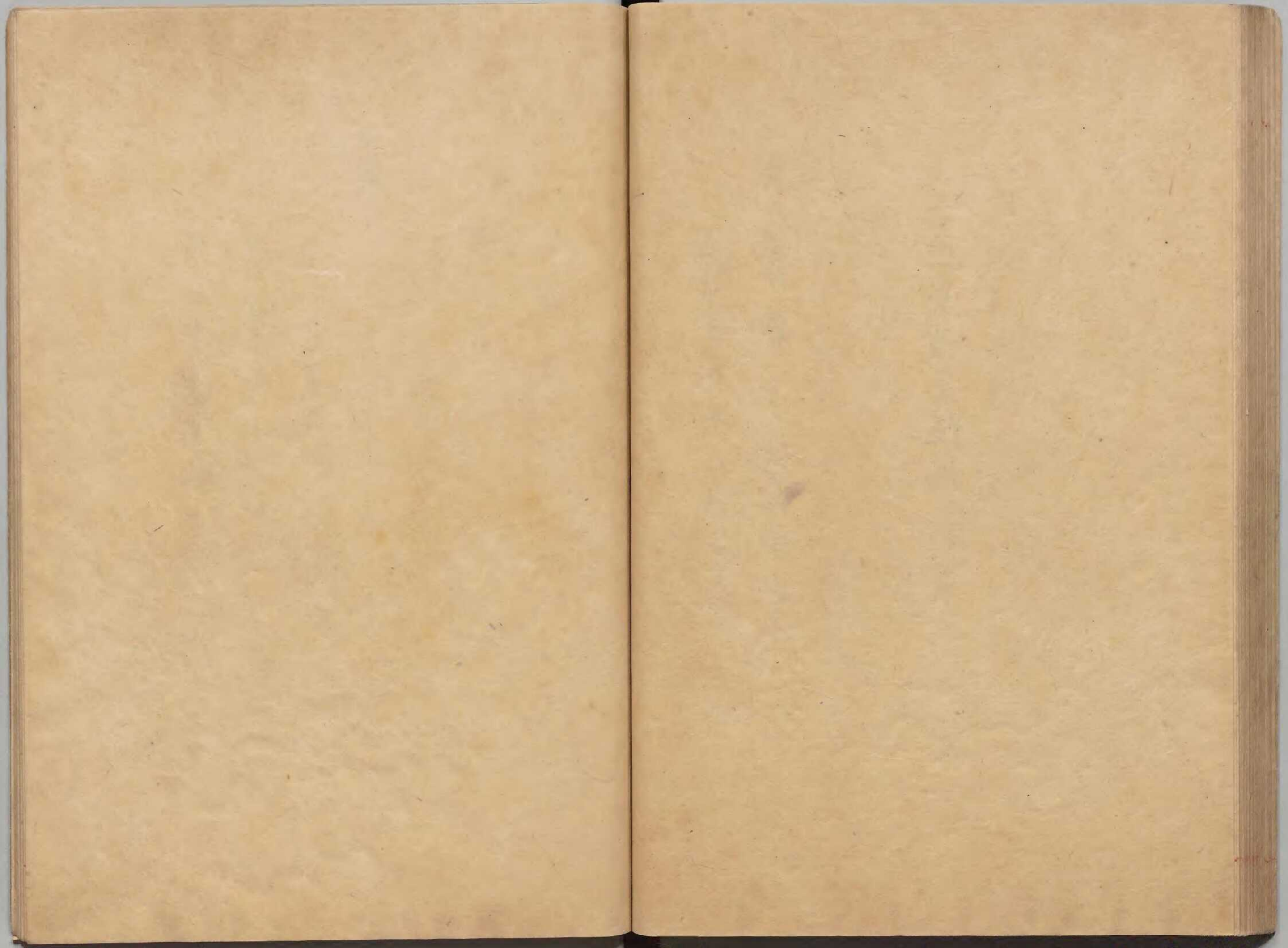
安重 アノチ

勘十郎

寛永九年八月十九日

將軍家より福見へつる

家の紋
粒つぶ相あひ割わり菱びし



● 果

友井ともい

奥伯与果おくはく

秀吉ひでゆきにふ

天正十二年てんしゅうじふにねん長久ながひさにをひらうら

死し

義勝

奥伯内通 中国之河

其長十三手 病死 歳四十八 法名

昌次

義政

坂井九左衛門 中国を江

流浪のとき 奥伯を改く 坂井次

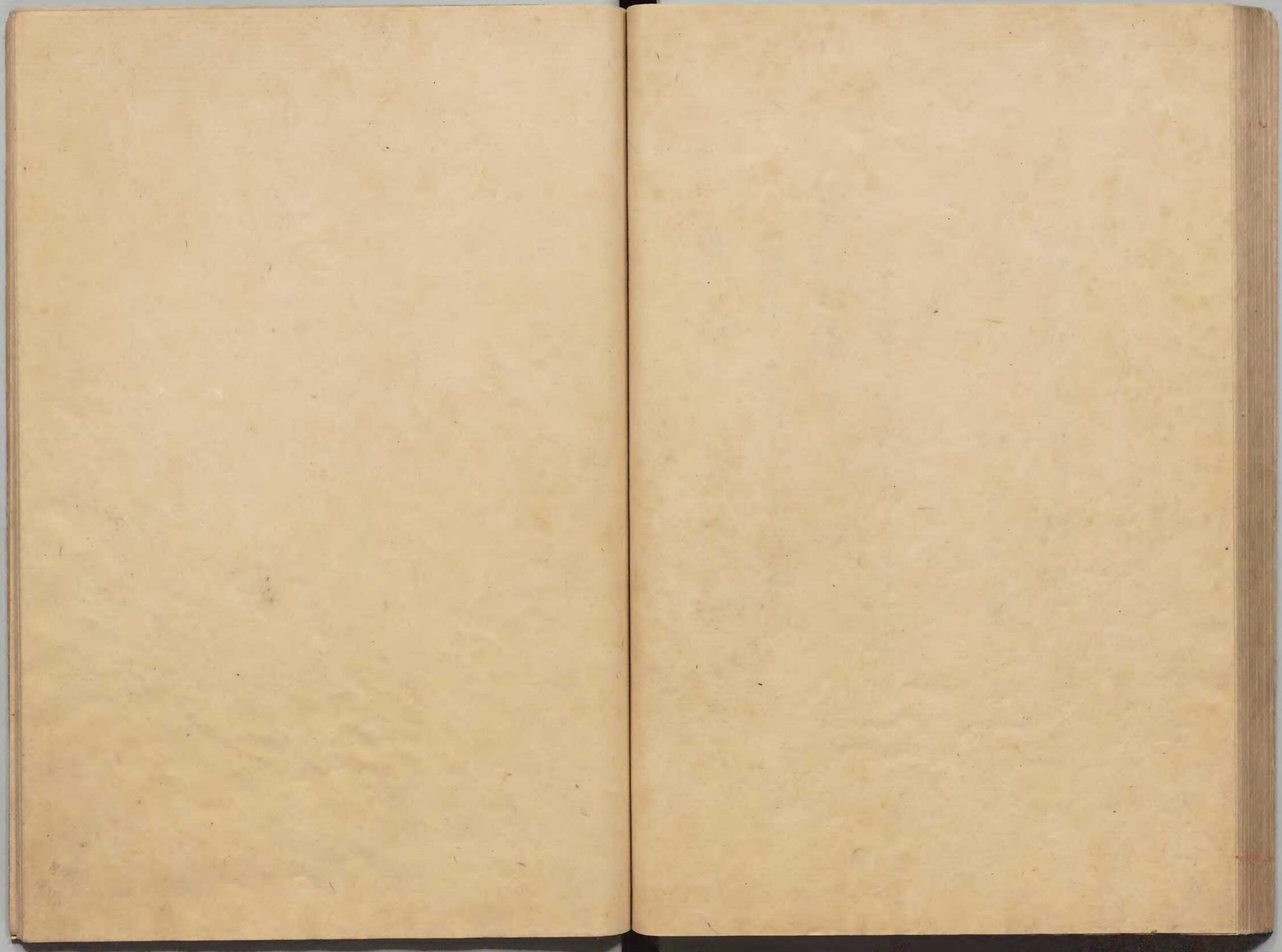
称と

寛永口手

右徳院殿をよむ

將軍家よりはく〜〜

家の紋 之頭 左巴



● 重次

萩原

家傳よりいへば村上天皇九代の後
胤流落して甲列萩原子孫と号す
此故より子孫を萩原と号す

宗在集 中四甲斐

右のハ武田信玄より後より
明徳

日向守りつふ又のちに大和古物
秀長回中納言秀保りつふ山内
りよひて病死歳五十五

重正

市左衛門 廿四回交

らぶの度明智より之は又大和古物
りし之又海前秀家にりつふ
大権現り湯りまつりお續で

右衛門殿をよび

將軍家りし之りそまつ

甲列よよひて病死歳六十七

重正

源左衛門 廿四回交

大権現をよび

右衛門殿

將軍家りりつふりまつ

雲クモ名ナ

徳トク茂モ

牛ウシ回クハ甲カウ斐ヒ

家カのノ紋モン 早ハヤ梅ウメ子コツツ枝エ丸マルよ

萩原

正信ただのぶ

法友集ほふとも

中国集ちゆうごくしゅう

法名宗本ほふなむねもと

正次ただのつぐ

法九郎ほふくわん

中国集ちゆうごくしゅう

大権現おほごんげん 法ほふ 宗むね 本もと

天正十八年 関東沖入回の何供也と
安永二年の死と 法名宗心

正名

清古悲の 中国回也

名法院殿をよび

將軍家よりほくくまら

家の紋 丸の内よ 平丸

正次

萩原

第刀

十四大和

元祖は世を越前

領と

るの及瓶茶中納之秀秋より之

後よ五村常陸介が許より

長十七年四月二日一病死蔵

六十八 法名通言

正利

久在集 中園題前

らむは父と曰く〜〜秀秋并

つふは女〜〜出され〜

大指現及

名徳院殿〜〜身してまつ

元和六年十一月六日〜〜死と蔵五十八

法名通言

某

才某

正利

之節在集

利久

長集 中園山塚

元和六年

右徳院殿下注^{とく}福^{ふく}して勲^{いん}侍^しとてまら

同九年

右徳院殿の泊^{いん}命^{めい}とてまら

將軍家とつとてまら

家^い乃^の故^こ囊^{なう}荷^かの丸^{まる} 今^{いま}園^のの内^{うち}未^ま央^の花^{はな}み

あつゝ心

